新纂和謌集 一

内閣文庫
和書
番號 一一六四八
冊數 四
函號 二〇〇 一一

太政官文庫
和書門

内閣文庫
番號	和	11648
冊數		4(1)
函號	200	94

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

あやしたちひしきちしめしたら何かはりの代らか
りしは世にとれさめ氏をそへちくろさしをいひこ給
をなすくさむしろあかくちらしてわか里にあらとし
あなた今のまへ○くもてあそひさうらはひとりすまき
給ちそくこの世にたる部しも続きちらしてなれ
女ふの名かふれ給ふ今んのとの御膳ちかり中にありくとうあ
しれはほん世にいて給まてえらひあつあく給へ給
十あまり七八ひよりん家まいりて給その何ひき
家くにあつめてる給ふくひみその事ともしう
さるへしたかあるをえ給のりし免状はたる持

日本政府圖書
消印
淺草文庫

ちぬのやとたまりなきは五日かかとりやふ火
乃りあちえくみえしりとおとめくここれたるを
代さめてそくし給よく人さ続しのちは實あん人
のまつりとまよめる紀あとよくへりあ免ん代ちさ
凡氏かさ○て何まつ経されめくことを世に代ひてあ
給よ世いしあらむくをう川みちまてひとり川ふ
まひ人くとこなく続しりとてこひは報さまりてこひは
まうつく世に代とかりある道ハよや治井よえむらし
さ給ちしよ代をまこりさん世のあめしみさ人あり
よこれとちゑや無給行代らりくふを給ひてある志

歌ハしきしま道ニて神代のあめつちひらけしより
くや神とゝめつゝよつきそて絶く此道をもお
ろそかにせす継に源氏さうりとたすけられハ傳
歌のうるはしく神もひかりにあさからぬこの
葉のもしろく梅の花ちんやうくつまりゆかれとてこつ
まにいへんあらはすにもおもりを歌うゑいとの
ときてしらゆく女くひよ眼んありそ歌らよ笑
作此その人の名をよつらたれそもこ代此御つま花
人々のきんある所のなよ所さひてハあそちも此哥よ
もみちあらん人々はとをみさとのかうるよ待くめし

ひらしき世紀此くおもとゝとゝゆも筆されは古今
こ歌をこの字此文字よろめあらハさんハおしまの小野
のさかる年不よ歌をもおそれハうりまれのめら歌
ともなくさめうりハこゝろの世まてもれとこむる
めうん元禄のうり見る力も弘和のいきよつる
まて世ハ三河をそしいう代と世のあひくらの
ころよまてくうひつうまつらくおりよ歌集一首よつ
あつまとひあつそ世歌をの義ふもとむのうそゝ
今のとのうとうりの歌とかそれとかそのうちよ
いこ歌まそ人とかちそてとさとて古今うひ歌さ

むかしよりつたへてもちひちあまねくこまやかなる
あそて新葉和歌集といへりなぞらへ撰集など
まち月なかりしみかどそうそのかみをひらかしるそ
わかのみちよゝの跡を行しる人々の後にゆかさとま
ひいきし門いてしみちのかりそめとくてそのおんとかく
あそて思ひよりましい佐ちらんひともめくらしひ聞えなやし
きみの園乃塵とする哉てたゝのさひと乃そこそこてさ
とりともひく心歌まとひ歌のあらてくさいとかゝ
ひつんね志のよ思されおは只行のうたかき給
池あるともゆくえても悟るかたくちありひとの人へえ

あはれさらひのつ歌なしなともいふとゝなかりつえんまうさ
百わかのうちわけてハ無窮風めくことをよもすらや
歯のすゑのまてもと渡風かなとおもふにてもしはし歌
四乃鶴わたりひよあらそひとなんつしれ松のよ
とせとあらはせ給へることつ歳れ松ほん気んと
いたひそてまつるよりて三ますて見て歌うちよ
うられとも葉ほりつゝ給へくミハく所のさくさ
よりおひ一ふしのとくつきあるをいあ後をとゝつ
佐中なしとゝもとゝものゝうるぬるのさまれ
もこと給ふれいそとはあまよ（まつり宗家の）との

吹風よりも清くえしかるを尊くさかりをせんぬく
ひもみたすましくのうちにさのことはくかく思ふ
ひあつむ侍るもとろみちらのやうにかな侍
ことゝに道あるひかる人のほきさあらはし
をのとなふむねをあらはしつるにたよりつるねと
そうさ侍るかいまの新撰にあらむるのさらしの
んと思ひよせかるうへにそてきむのさいそひ乃そえ
よむさと侍るこのあさて殊にあまたのよ御とりてき侍は
そわてとまとくはつかしくありあまりして弘和元
十二月吉日殊と参もをばそてのすまさ

則さらむ人はいへらくなよとのすかたこゝろを
さとりこの時にあらむ人もいはゝ和歌の道くだらさし
海の乃なき侍れ代なからむとてこのむさらに海
時有と空の上に幾の名枝の梢花から花を前
のこし給ひつゝ落花幾度こゝろさして濱の真
砂の浜のゆくすゑなくあめのうへにちりそくさ
て千代の風をもろにあふ行ためのみち

新葉和歌集巻第一

春歌上

立春の心をよませ給うける

後村上院御製

[illegible]ぬる年とともに霞あまのかく山

年の内に春立ける日よみ侍ける中に立春を

中務卿宗良親王

まつ年のうちに春ひまなく年たちて霞はさそふあさ霞山

人の世のはるともしらでしくて百とせをつく

まちこし春その日はちとせと春の子の日とくらす

世をしらせける　御製

風さそふ海の波もとゞめてうち出る浪にまさるや立らん

百首歌よませ侍ける中に

冷泉入道前右大臣

九重の都にまづや立ぬらん天つ雲井の空にさへかすめる

建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首歌よみ侍ける中に春天象を

中務卿宗良親王

花の色のよもの梢もしらねども時をしるのは霞なりけれ

右大臣に侍ける時家に三百首歌合し侍

春日に渓雪といふ心を　関白左大臣

宮かけり又こそ谷に出ぬきたる○よとの声の下水
なかしらす次　前中納言為氏

ほさきもなほ代積の雪も消そめて宗かく山谷雪れたまか
雪の下猶宮とりすなよりかん代りりを待

春宮大夫師兼

風さむきたなかをつゝみといふ緑や雪にあけ春の下陰
百とせを寄りかう世新しあらは春

後深草院御製

河清て庭よりほかもかゝる宮のみなかみ尋ねつゝなは
寿九年の中に　西園寺内大臣

君か代は八つを流ときれる流れ世尊ては水のあへは宮そあそ

冷泉入道前右大臣

ときくも谷の古巣を出そめて人にまうられぬ鶯の声

正平八年内裏にて人々に題をくはへて千首
歌よみ侍りし時池辺鶯を

前関白内大臣

おほゆれつの谷の戸出し鶯の君か代なかく聞ゆと時とすなる
春の哥の中に　よみ人しらす

まよふれハ花よりつゝく葉のいろこそかはらぬ松ハ久しき

御堂とふ寄心を　後柏原院御製

よろつ代の日影もくもらぬ空のまゝ猶ためしある

詠しゝ次　中務卿親王

萬代のためしの野辺の色ふかく

西年比年内書始て人々年中日々詠

三百六十首歌讃嘆給へる由を仰せ給

いふ事なれハ書置侍る　右門大臣　隆

今まて代々ためしつゝ宮をふたてまつる

百首の中に　此世かはらす

後柏原院御製

天曇ハ山深くも橋ていくかへりの宮のたにあらし

詠しゝ次　後醍醐天皇御製

春日山影も又葉かへりいろふかく葉の色の秋のもみち

太宰師泰成親王

消てもそ宿をとひてもかの野への色も今やつれ

前大納言家房

秋の今とかへるやとの色のあらしにかはる

入道前右大臣

今宵まてかくれのつの原ハ宮ものこる

題しらず　読人しらず

立こむる海霞のそこの白雲は山のかたらにかゝる白浪

山霞といふことを　左近大将長親

まつさえし白川風さむしみよしの河や霞の衣のたてやま

日前宮にたてまつらんとてよみける千首歌の中に

冷泉入道前太政大臣

まくれ行は霞をわけてくるさやの山の尾上そ遠さかりけり

題しらず　入道前太政大臣

今ひとつしとみえし峰は松の霞の底にいそくなる哉

海霞を　中宮

さかのゝ御しの浦の鶴霞さらかきにてもみゆる春風

文中三年内裏にて人々題をさくりて千首を

続歌合し侍りし時海辺霞といふ事を

関白左大臣

和歌の浦やあしへの夕霞はるゝそらくかすむ春の

天授元年内裏にて人々に百首歌合し

侍りける比　前右大将師兼

さくら花ちる霞やふかく成ぬらん遠さくらもみえぬ浦松

正平廿年内裏にて人々題をさくるとて

百首歌読侍りける中に暁霞といふことを

右大納言忠有

吾妻の原人めかりそめてむさし野や沼もさかりに匂ひし春

寒梅といふ事を　新宣陽門院

木枯もとはでこそ見れ春の夜の月に梅のさかり

梅薫風といふ事をよませ給ふ時

後村上院御製

匂ふなり春の夜ともしらぬ梅の花袖とさ連衣春の名残

題しらず　後醍醐天皇御製

梅むらさきのをちの乃匂ひともまつの風の吹かへし[illegible]

文中三年内裏五十番哥合に　庭梅薫風

といふなると

式部卿惟成親王

夜な夜なをさそふ風のよ匂ひくる[illegible]の梅の花の上風

題しらず　よみ人しらず

吹風の便つらけれ梅の花[illegible]やもさしの月へと

一　文中三年百番哥合に　右大納言実為

匂ひくる風はたれか鳴く鶯や梅咲やとの軒のはつしかと

春の字の中に　最恵法親王

すゝめしやあはれ床の梅の枝にやとれる春の詠

今よりは[illegible]の宿にかはり

春の梅の香をのこさず[illegible]とて

従一位前関白内大臣

いとゝなを色香そふへき千本たらく良宿梅かえ

ためし　御製

春の宮の木本たちへ白雪なりしハ今そやとまり宮の梅か

くの音二年まても中ま

中務卿家良親王

咲さかりもむかしにそ梅花いとゝかしらの宮にみえつ

春のめくりて人をさそふ一日千とせの齋

今も猶鴨梅花後客といふ千代

関白左大臣

何ことも文嵐そつく北梅の花もにほひ人はよとひかな

五年十六年内裏にて人々歌よませられしに百

首歌奉りける時柳を　権大納言為家

青柳の糸とりかけて川の瀬よりかくむ藻を栽やなかむし

題しらす　前内大臣

春風よたつかせちらす柳の糸のたとえの青柳かな

同年八年内裏にて百首歌中小書題を

中院入道一品

野へとをみ春の色そつくるまかひたるの緑を之はる

同廿年内裏にて人々歌よませられし三百六十

正安後宇多院に紀伊国を

右兵衛督為直

ありとても今こそみゆれ春の月光ふけゆく夜半の空

くもゐ哥めくりしにほひくる[illegible]を

御製

たのめこし神の御風も[illegible]いさよふ[illegible]

開白左大臣に侍りける時家に三百首

歌合し[illegible]春の[illegible]

前中納言定房

出ては[illegible]つき[illegible]

千五百番歌合に[illegible]紀伊山[illegible]と

権中納言経高

いつかわれ出てゆくも[illegible]春の夜月

春の夜中に

後醍醐天皇御製

いにしへの露のひかりを[illegible]やと

中宮

むかしの月をかけて[illegible]む

正平六年内裏三百六十首歌中に

月

前大納言為定

百敷や[illegible]の月

又百番歌合に　前内大臣家

志かのうらの磯にすむ海人ハかたむきてかさねてみるらん

うしのかゝみ月人侍しに撰歌中百首歌侍く

秋のよの人の心に侍りし中に

中務卿親王

やとかるよかたのむしのねやまたあらぬ秋の露に月のきさらぬ世ハ

百首歌中に

冷泉入道前右大臣

えたしもえやぬ青にかゝる月のあかつきはあもしほのむらむ月

題しらす

中院入道一品

わたせんさくそてをかたむ月影のきえぬ風の袖よくぬる

幸子内親王

揉まつそてや月のかむれさへもやまの入る

権中納言実具

さのさやハ窓ろくつき見え月青おとしね袖よやとくる

入道前関白家にて題をさくりて一首そへ

里名海を紀伊国を

右大臣

あきの山おくれても月影ハ窓の外にかたやとまりける

秋のしらのくを

永嘉門院

花のしと思ひね勝の宿をあきや人やりたしね夜の衣をかな

中務卿宗良親王

ふるさとはなをいかならん思ふことあらしの山とたえて行や

五百番哥合に　御製

しらすかし我もむかしにかへる道芦屋の寺の哀なりける

世の哥の中に　前中納言為忠

流れ行花の木のもちれ霧のしたむせひし宿も霞哉

題しらす　内大臣

春の川夕波の下にあさみよ末ハ紀の川原かすみつゝ

月おもふよころんそなかりける哥の中に

法泉入道前太政大臣

まことにしる色もかはらて流るゝよさらに宮ふるさとの底よりかゝれ

中務卿宗良親王人々によませ侍りし

住吉社三百六十番哥合に [illegible]

権大納言顕経

夜もよすか誰やしらん浦のまつやぬしさへ見るらん

百首哥読侍りし春中に

前大納言忠経

芳野山こえて後のこゝろの音の山もさくらとまよふかくれ白雲

同百首哥読侍りし春中に

民部卿為定

まことにはやく人の心そ見えにけるもの思ふ身には

詠めしらぬ心をとかめ世の人の春

中宮

折しもあれ花のさかりをまちえつゝ

春のたちまちの春の花

後照光院入道前太政大臣

消やらぬ雪と見えつゝ山桜花よりもまたなかりけるかな

前内大臣隆

咲やらぬ花の日かすをこゝろにてまつほとさむき山かせそ吹

日数へてまちこそわたれ花の春

今泉入道前右大臣

さくら花まつ新とさく花そまつ日かけさす山桜かな

見し次

従二位保子

年をへて待ちし山桜さかりなるつくさぬをまつたのしみ

貞子内親王

待にける梢は花の咲にけりまつはさそふ山かせもかな

前大納言季経

咲やらぬ花をまつらん山の端によそにかゝれる雲そたえせぬ

上野太守守永親王

咲そめし梢もやかて白雲のたへてかゝれる山のさくら花

後村上院御製

あまとふりよましく月きよみ世は露の身かかるをまとぞてやしら

二品法親王守覚

高砂やをのへのまつにふく風のそよくにつけて露の身は

正治元年内裏三百六十首哥に露ひとつとひよせ

てらさんそこそまくりの露ひとつとひよすかな

従三位国量

嵯峨の山ちよのふるみちあとありてまたわけゆかん峰の松やまん

後村上院よりおほせられしに法印

まきの葉の中よ

洋子内親王

霜しものかりのやとりにさむしろのよるはことさらにふかき山

承久元年内大臣家哥合に　前内大臣

ほのかなる後の夜の月もかはる風に

むかしの雲

延慶三年前内大臣

よしなくさきはまたねましくもみゆる

あはれなる道もいかにしてまた

桜花ゆきかふ人もなし

よるもねざめ

しげる浪

新葉和歌集巻第二

春哥下

題しらす　　後醍醐天皇御製

今はよも枝にこもれる花もあらし木のめ春雨時をしるなり

よし野の行宮におはしましける時雲井の桜とて世尊寺のかたはらにありけるか盛に咲て侍るを御覧してよませ給ひける

こゝにても雲井の桜咲にけりたゝかりそめの宿とおもふに

中院入道一品

もとの雲井の桜君か代にあふへき春や咲てまつらん

花の比哥中に　後村上院御製

よし野山花も色そへて咲にけり都のつとにいかゝやおらん

咲ぬへきころ枝にうつろふ川ゝ浪も色めかれ花ぬまに

前内大臣　隆

今日さへ霞の霧にしかくれ白ひそへ人に春山桜かな

正平廿年内裏三百首哥中に讀む

右兵衛督成直

山桜咲ぬる後ハみよし野の瀧の白あわもちりそふ雲

花哥の中に

入道前右大臣

名にたかきよしのの花の瀧なれや瀧のいとなくもと雨

前大納言忠任

志賀の浦浪のよるこそ寄ふ河もひらの山の桜ちれは

正平八年内裏毎日三首哥中に詠む

前中納言為忠

みよし山神木の桜もちらぬ紅葉のうへも見よくらし雪まさりて

花の御哥中に　後村上院御製

志つかなる雲とも見えし遠山桜さかりになれハ白雲の峯

霞もを　福恩寺前関白内大臣

山の端ハあさの雲間に晴る影の月のなかめにて明ぬる

光ちるかな

入道前太政大臣

白雲にまもつゝく山桜をはいくとしもあかしと思ひし

後村上院内裏四季歌合せられ侍し時暮花を

右近衛将監為直

春ちらて高嶺の霞ひまもなくのこれるも山のはの花ちる比は

落花の歌よみ侍し中に　・二条法印良冨

風よりもさきにいひし山の端の霞の雲もよそにみえつゝ

侍中納言為藤母

あさ山のはなのいろにもしみましてはなのかせをもいとふなりけれ

前中納言為重

あかなくも見ん花の桜色入日さす深山の花の色のかはらぬ

関白左大臣

入日さす山のはの花のさかりとよりこそ霞のいろにまかふらめ

夕花を　准后入道前太政大臣

まつ世山入相の鐘もうらみしは花にそくれぬ君かものから

題しらす　前中納言忠藤

待ちちる花の日くれしとても行人は花の陰の誰のまつ

入道前右大臣

あはれとやとめて咲んはいくたひもかくてもあかぬ春の花ゝ

正平十年内裏百首歌の中に落花

前大納言光経

花桜かさしゝ小治らむ高嶺のさくらのみ見るかな

住吉社三百六十番歌合に春桜

よみ人しらず

山桜ちるまてみんそは家つとにおもへは花の色やかはるらむ

扇の絵に吉野山にたれかとこゝちやすらひてたち（る）花の

枝かさしたる所を人のうたせ侍りけるにかはりてよみ侍りける

中務卿宗尊親王

雅ちるをしるのちはちるを手折らんさても家路のつとにはせよ

五百番歌合に　二品法親王仁誉

よしの山花のさかりとなりぬれはみ（ぬ）人もなしやまさとの春

吉野には過て花なりし桜かけむ（な）人かな

あつかれはおもはせて内へ出る世路きる歌に

新待賢門院

見てよ人さと思ふ桜の一枝を折ての（れ）は女人くらへみるに

五百番歌合に　入道前関白太政大臣

よし野山かねてもよしの山のさかりこそせめ花の下陰

よしのくもりさそひて人くまるさくらめされし歌に

山もとにゆふつかきを見るせ路よみ給

河　読

わか宿と思ひもすらむをのゝ山もとなるはれ見るもいとせ

みよしのゝ花をまさしく雲世にかくれなき中よ

後村上院御製

をのつからあふ人のことつてもおもふ所春のともめ集

文中三年内裏千首の哥に山家花を

権中納言経高

山ふかくいりてそ桜のなくはこそ花よりの春もなかめ

花山院の八年かへりもの花をそやまて残侍らう

名所

右近大将長親

吉野の山なれ桜さひおくよりみし春ハむかしなれとも

延元四年春あるかたの御所にまゐりそめて一た

ちよのかめにまつ日のみすゑ廻侍し時前大納言

ためしありこゝろ八ツの花さとちやいつうさん名所

折よ山の桜ハんとむともゝよそわて侍し起に

小

中務卿宗良親王

春ハ物くとそもみちのもの華をいつしみゆえん

禁中花といふ事をよめる

右兵部卿師兼

九重の雲のうへ人の花も見れ又庭の花やなかめん

いく年めくり廻しつゝくる春も花といふ事を

御製

此風をも捨させ侍事の道あるゆへに伝へ給へる
給ひしところを　　冷泉入道前大納言
御しかるに八嵐の世も明ぬ世になりてそ様々宗にはこれ
正平廿年内裏三百六十首歌中に載せしと
いひしを　　前中納言定家
うけつたへて家々の此道をしるとや風ものふかき
中納言定家中将為相大納言為家うけつたへり為家
卿家に百首歌奉りける為家中納言にて詠を
右大臣
立たる御階の様にかはりたれは袖に自らまなひ

大納言殿まて伝はりたる御家のしるしの書内裏にて
て人々歌をよみけり　百首歌読侍けるに藤
中納言とは為氏を　前大納言為氏
まてに世のめしを為家の教にて御階の書伝
百首歌奉りし中に　冷泉入道前右大臣
為のむそきに別ても系図のしるしなりける所
さらに其家に伝へたる為家の家の中に
禁中也を　　中務卿宗良親王
みやこの人も思ひやる為家の書
西園寺八条の伝へこともまなひてくる

さく花につけてもまつり名をつけてよ折給ひしを
後村上院御製
あひ思ふくもゐさくらん桜花百敷のむかしも世々の春をさらなむ
む哥乃中に　さくらひとつを読
むかしなつかしと思ふ人よせむる我の桜はむかしに[illegible]
天授二年内裏あつく人にさくらを給ひて百首歌よみ侍し時花を
中務卿宗良親王
桜花あれはある道やいまをね六十あまりみちとせあまる花を見るかな
さくらを読
中院入道一品
みよしのゝ花のいとなくさかむあとて桜の[illegible]
従三位俊文
なをさそはくらゐや桜によそむは花のすてひたすら
まそらに散りしとて花見むと
中務卿宗良親王
嵐吹夜半のさくらいかならむ雲井のくもいたくとおそみたれる
花歌の中に
中院入道一品
まことね桜ありしとふのまに[illegible]
百首歌合に
民部卿光資
うつろひにきんとする桜あまたなるをみてひとそめ

右内大臣殿

吉の川岩こし桜の流ハちりても花の波やたつらん

芳野の春の中に　前中納言為忠

しろ雲とみえし梢よ咲る一樹の花のいろハのこれり

後泉入道右大臣

とりくたる吉野の山も春ふかく色にうつろふ雲の横たなひく

右内大臣隆

のくまくろ雲の色まのこんとそあて都にこそかわらん

永嘉門院

桜咲そとくら峰よりひとそ見る分の春に都里なれ

関白左大臣

桜花咲ハ人こそ咲ともらうハちる春とハいつ思ひし

まこと人しる歟

引めくる春ハ嵐後ハかくさ川そ流ても見えし花の白浪

千首歌奉りし時花歌を

右近大将長親

月の夜ハ霞の梢ハ明やらて風にまかする花のちらくも

題しらす

二品法親王聖尊

吉野河ささなみの色こそくもらしせぬ波とちる桜

建武二年内裏千首歌中に

中務卿宗良親王

吹風のつらさはさのみいはしとやさそはねひとりちる花もなし
ものゝあはれ中に

右近大将長親母

さくら花さくらの雲は晴よそり待ちし花も今やちるらん

嘉喜門院

嵐ふくみねの桜ちる時は春のうつろひもみねの山路もさひしからまし

五百番歌合に

大納言忠有

うつりゆく日数につきて散花のつらさとそ思ふ春の嵐

千とせふるめさましくさ吹よ散ものちるこそ

御製

すみそめての後には志らし吹桜も散てそ人はさめみんらむ
ものを

中務卿宗良親王

つらかれはむかしも見え色ならしさらにさそはぬ庭のこの下の宿

前内大臣

嵐吹峰より今は落花のあとまてまさぬりしかねものなき宮

五百番歌合に

権大納言具氏

桜ちるはわさまちたるともみえしにしかれはのこれなく風の宮

落花のこゝろを

兵部卿師成親王

春の日にはおほく花を吹さそふてひとりよもの山風

跡はみの浦落花をさそひ浮ちるをたわらくまちて大空

所思といへる心を詠とて

中務卿宗良親王

花咲しやよひの宮人もちりはてゝおもかけのみそ残りける
かなし

春宮大夫所思

数ならぬ身をこそうらみ深むらさきと色ましておもひつゝ過ぬる

桂もといふ事を

右近大将長親

嵐吹桜は思ひもなかりけり春の跡なく花の下ゆき

五百番歌合に

権中納言実夏

むつゝやあまたの人も桜狩のもとめてきたる花の山ゐそ咲

春の歌中に

右近大将長親母

光ありし宮よりは春もなほそ桜かりの花のみなれてそむきぬへき

曲水宴を

前光内大臣

廻りあふ今日はやうかめのさかは水なかみより流るゝ盃さらに月

路前代といふことを

権大納言公夏

昔の道行けは前代の水もなかしよせてそひく

春雨の中に

新宰相隆流

むら雨は水のあか流れとせきとめて春ともしらぬ世の花の色

歎老をよみ侍

冷泉入道前右大臣

ゆく河の夕波のあとにもしらぬかくねかへりとゝまらぬ山明

弥生の末つかた山中にて内大臣信聖といふところをよみ

いくとせのにほひなん侍りなとありしかしこう
ゆるしあひて侍りなとゆるして後に一つかはし
侍る　前大僧正慈意

後のためまもさらぬなみにてつらき待なるに待る身さへ

百首の歌　後侍りける中に花を

文貞公

咲にけりなとしとそ思ふ春の日の光にあたる花の露霜

暮春のこゝろをよませ給ける　後村上院御製

此のとしくれのしたの春かへる春の日数はとをの松山

二ノ十　終

寄近對春欲暮といふことを

春宮大夫行忠

むかしの月にかはらぬ春の夜の春のなごりそいさよひのそら

暮春といふことをよませ給ける

永嘉門院

松風のやよひのくれをさそひてやまてとなをや春のゆくらん

暮春歌を

新宣陽門院

とまれとも花咲かれ春のむ
春のゆかりに

ゝちらさみ哉

新葉和歌集巻第三

夏哥

百首哥よませ給ける中に

冷泉入道前右大臣

百くさのやよひの花にうつりしものかはらぬ衣かへせり

たゞ袂惜むとはなき衣をぞ

中宮

なしとてもかくてもまた夏衣あつきころもの袖のうきかな

建武二年内裏千首哥の中に

中務卿宗良親王

さ夜ふけて月より行も雁の声のなきて過ぬる空のあけぼの
五百番歌合に　御製
なかなかに山もまよふに雲まよふ霞の中にかすむ月かな
百首歌奉りし中に
中務卿宗尊親王
春はけふ紀よ花移りと詠しなれて花もちりぬる夜半の木の本
新樹を
前大僧正慈鎮
むかし思ふあとの春の色も見えなくにしげる木ずゑのしら浪
式子内親王
神山のふもとの浪にかかりける木のしげみの陰ぞ涼しき
正和元年内裏三百六十首歌中郭公
といふ事を　前内大臣隆
一こゑは猶待たれける郭公いつの夜あけのあとの思ひを
同八年内裏三百首歌中に
前中納言為兼
深山ざと待たれし郭公いつしか夏の月のひかりも
百首歌よみ侍りける中に
権中納言長賢
足曳の山のかたへの木のまより月もさしつつ
郭公といふ事を　権大納言

かくしつゝ浪待夜のさと思ひ出にさえまさるとやつまのみるらん

上野太守懐那親王

一とせもなし浦の山見えつるはいつ代からかり法の道すら難

冷泉入道前右大臣

露とのみ消えにし道の月とても何とかはいひつゝ我身の今こそ

前中納言氏忠

清き道をさへ我たつねしものを雲井のすみの月かもおもかけたえん哉

千とせ寿をかけし明月と呼なかしともよ

春宮大夫師兼

世の中つきにし袖をみよかし思ひし年の月そ桃にこほれけれ

若かん親王家にて人ゝに千首歌よませ給ひし時

右兵衛督成直

ちかはらは思ひのまゝに都にて山の端を月にあかす

天授二年内裏百首歌合に

関白左大臣

なかなかに浅香の山のそれに見えて君の一すちもなる

天授百番歌合に

前大納言実為

浮世にはなにもおもひそへ何事を見てたのしき孫の

題しらす

中院入道一品

しら孫のうへにおきそふ何事かはかりにも一すちの

うみひとよの次

ゆふ暮のこゑハまよふ時鳥ハ海わたりてかゝる思ひ見え

太宰帥邦省親王

ゆきよりも鳴とハ時鳥いかなるも待ほとの山辺にそなれ

建武二年内裏千首哥中に夜郭公を

中務卿尊良親王

時鳥なに月とかたらふ人もあはれなかむるといふ夜半

正三位国夏

待わひてそいつも鳴ぬる時鳥月夜なるらんのそらの中空

夜哥中に

前大納言実光卿

時鳥まちてやきく人待よひしかとも我をかたらん

天授二年内裏百番哥合に時鳥を

民部卿光資

時そともいとゝ待こそ逢時鳥まつはいつとなきにけん

聞郭公を

従二位親文

いつかたに鳴まつらん時鳥まつハいかなる雲の果まと

上野太守尚永親王

名のみなるにほひとて時鳥はなき人のあかつきのまん

関白家三百番哥合に郭公といふ事を読

てつかうまつる

右近大将忠親

はゆかる庵寒き夜乃一ゝ衾ハ音たまゝね河ちられ

正平十二年内裏五十首の中に暁鄕ニを

冷泉入道前右大臣

一ゝ衾はかねの月影に更ゆくまゝにうつりかはりぬ

寝覚乃鐘といひけるを

前中納言忠成

ひと聲を又やこゝろに河雲猿声の中にわたる

新宣陽門院

一聲ハそれかあらぬか寝覚して猿声の今そきこゆる

うきのまれことも聲をきゝて一日寒歌の中に

待郭公といふ事を　御製

みかさるる猿声のをちかたにも我宿のまつかひ

聞もなく　妙光寺内大臣

なれを待ちのさとの郭公あるかなきかの雲のうちの声

正平廿年内裏百首歌の中に

ゆめうつつさかしの秋のむしのねにもひとむかし郭公これ

聞郭公といふ事を　前大納言季経

あさゆふに月ハゝねの河雲らやまてとも見えぬ

正平八年内裏千首歌の中に庭郭公

前大納言光経

又異ハまこと東よりの代に聞るなかりてやくの孫えらん
院撰百番歌合に　中務卿とふかく歌主
たつ忍るけ駿河の空もかくまたつけるえたかたひ
る
照心郷云といへるを　かぞへる内大臣
ふくとりく嵐山の横雲まつりて　郷云これ
なのくもりまでて百首許りあせ給ふ久御中に
同新古今よりかゝると　中宮
すゞ嵐山もくなかの花や秋の今はつ孫まつる華
後京極摂政百首千五百番歌合にて左勤
ら見んひとし源

なる霞の里ハ山のもとれハあまた名所郷云ぐ
西中卿云といへるを
郷云なれときまた次八月ものやうなしと思ハまのしや八
遠しく次
嘉喜門院
足曳の山ハちゝる遠郷云などの八月ハさとるれなら
明る夜のうき月かけれとりいはやめ見ね明となくる
又月又同薫滝の孫まつきて西国いせ給ー
新待賢門院
まてしはらくあのむかしの空きえまひ久御あやめの孫とハえん

同し

中務卿宗良親王

つらきゑもろそろひね五月雨のころ思へ

[illegible]中百首歌よみ侍しに菖蒲を

けふめくるこひ侍や思ふや都もよそのまくらなるらむ

題しらす

上野太守守永親王

川きしの苔の下水音そへて岩ねをこゆる五月雨のころ

よみ人しらす

山川やよとせし淀の岩こえてせけともしらす音もたかくなる五月雨の比

前大納言守親

はるゝ間の人をそ見んと山深のくものうへなる世の五月雨の比

百首御歌中に五月雨を

後村上院御製

五月雨はいとゝさらにや高瀬山川のあさせも浪さへ立ける

正平八年内裏千首歌中に五月雨を

前中納言[illegible]

うちはへて今日もけふも布引の滝も白糸の五月雨の比

法泉入道前右大臣

題しらす

五月雨にふりそへて岩瀬の滝の上の水の[illegible]かゝる

山家五月雨といふ事を

前内大臣[illegible]

霧りあふ梢ハ雲にまかふまて山の端見えぬ夕月夜かな

題しらす　　權中納言經高母

思ひやる心の雲も隔つらん伊駒の山の夕月夜の比

吉野の峯の雲のそなたの人のそのことも知らさらなん

しる須磨の浦波に夕月夜とハにそ年をへぬらん

世継にて侍　　後醍醐天皇御製

秋の夜にさひしかりしを雲ゐにねやの奥の夕月夜の比

信濃國に侍りし比都なる人のもとへつかハし

侍し　　中務卿宗良親王

思ひやれ都のことも雲とつゝ山のこなたの夕月夜比

五百首歌合に　　權中納言經高

昔にもかはらぬまてそ秋の夜ハすからはへん

題しらす　　前中納言爲藤

霧りあふ信太の杜の下草ハ千枝の梢に秋雨そゝく

光因家三百首歌合に夜寒深といふ事を

權中納言實具

嵐こそ月の夜のさむさハ夜ふかき夜の深き夜の里

夜寒を　　後醍醐天皇御製

霧のまよふ夜ふかき宿ハさらにかくてや秋の色をまよハし

夏の夜寝中に　　權大納言公宗

風さそふくもゐにくれて秋風にくもらぬすゝし夜半の月

文貞公

山のはに雲もたちそふ秋の月さやかに夜の空
千さとの空もかはらし晴る夜月易高といふ心をよみ
侍りけるに

関白左大臣

山のはをいつしかとまて夜の秋いまそ長のゝ空の月かな

題しらす

二品法親王覚性

晴る夜はね山にかゝる夜の月影さへに清き川波

後醍醐天皇御製

かしはらの月をなかめてしのゝめのあけゆくかたの山のはそ見ゆ

妙光寺内大臣

晴わたる空や秋のゝ夜半わかれしとゝのうへにかよふ月

前大納言光但

すゝしさは芦みたれ秋の夜さゝめて彼も涼しきみのゝ夕月

夜暁月を

後村上院御製

夜ふけの秋の芦たれ影もさやけき月もあかり行ゆく

百首歌奉りし時

見渡せはふけてひとむらの雲の上の光すみゆく

題しらす

よみ人しらす

かすみ渡る雲のあとなき月見にそ渡る夕 圓光寺

水邊螢といふ事をよませ給ける

後村上院御製

夕暮の夏草しけき沢水のありとしらせて行ほたるかな
くさの葉の流れ行水の中に野沢の蛍とみゆらん

春宮大夫卿忠

夏の夜や露に折(を)れし夏草のみたれておもてふかく蛍かな
影しられける

前内大臣

夕暮は思ひわひてそあつまちの小沢の河茅に乱蛍か
風かよふならん行りの中に蛍

右大臣

乱蛍とてこそ沢辺にいつそ身におもふ思ひをもえそまさる油
おもひしらるゝを

前中納言為忠

のこすまし河の思ひに乱れ行や小夜ふけて乱る蛍かな

納涼の心を

新宣陽門院

夏の日の入かた遠の雲まより夕浪かけて風そ涼しき

五百番歌合に

右近大将長親

庭りの上梢の木風夕すゝしいふかり風そまさる

内裏千首歌合に

左近大将正忠

夢ととも侍いつの年の志水底涼し夜風そよそよ松の下陰

樹上蟬といふ事を

前中納言実秀

山もとの柳の梢にうつる日のさき風にきこえてせみのなく也

夕なきにもる時雨世にふる蟬の声

後村上院御製

日暮行の声はまたとまる梢の松風すゝしくおつるたきつせ

蟬しく涙

右衛門督指房

はつかりはまたこの下露みてるなり夕立さそふ秋風のおと

正三位国冬

なく蝉の日暮の声の山もとは夕ゐる雲もすゝしかるらし

五百番歌合に

入道前関白左大臣

山かけは猶ひもあつし夕たちの露のなこりの松のすゝしき

住吉社三百六十番歌合に夏 兼胤

よみ人しらす

みなかみに雲ふる夕立しける川の瀬の

おとのみたかくすゝしき風そ

流し

新葉和歌集巻第四

秋歌上

千とせふるまつにもしる秋風とよある

中務卿宗良親王

浅茅生の小野の篠原風そよく人しるらめや秋ちかきとゝ

題しらす

前中納言為定

夜と秋とはあひの世のかれくと明る門田の稲葉は
しらす

千首歌よみてまゐりし時初秋暁と

右近大将長親

暁の稲葉の床の露そよく枕にもしるや秋と来ぬらん

まさゝ大夫師忠

今よりの旅人の床も哀まてにそ志ら吹秋の初風

源氏の物語にことよせてよみ侍りける哥

の中に　　中宮

袖にやまさ入てぬ秋ならんをとの山は風こそ身にしむ

秋の哥の中に

新待賢門院

夕されや荻のうはゝに音たてゝ吹にも知ぬ秋の初風

応永十八年内裏にて人〳〵題をさくりて

百首哥よまれ侍りける時初秋の心を

後普光園院内大臣

行末の雲に涼しく吹そめて秋に侍らぬ初こゝ風

兵部卿親王家にて百首哥よまれ侍りける中に

民部卿光資

思ひきや伊勢のはまをきも志ら風の身にしむころや秋を知らん

海辺初秋を　中務卿宗良親王

浪まよりうらみるめに秋はきぬれとも松にあかずそ浦ゝちかくそかる

関白家三百番哥合に萩落来穂といふ事を

よめる　前内大臣

風吹はまかきの篠の落うちよりて先秋はこえ

建武二年内裏千首哥中に

中務卿宗良親王

おしなへて吹かむ萩の上風をたのめくれは秋はきにけり

正平廿年内裏三百六十首歌中に萩知秋風

いつまても

従二位儀子

秋きぬとたれかつけゝむ下萩の末こす風の音まさるなり

同十三年七夕七首歌講せられし時待七夕

まつとしも逢世ならぬにたなはたの

後村上院御製

いつはりのなき世なりけりなかめしもや歎きぬる待つらむひこ星の空

七夕橋

冷泉入道前右大臣

暮ゆかはわたせる瀬ともなき天川あさけの宿のかへり

道しるしに

妙光寺内大臣

岩根とふまつ水にけふの宿りまてかはともなき秋を露の間

よるへ人ぞ涼し

ねられつゝ露の洞のひまの秋をせにてよるひや袖を星あひの空

貞和五年七月七日内書まて人々歌つかうまつ

りける中に

四條前左大臣

いく年もかはらぬ契りたえせぬの星のみかほにかはらぬ空

又百首歌合に

権中納言実興

逢ことをたのむ星の秋とてもくれぬる夜数や星あひの空

題しらす　　前中納言為氏

七夕のあまの衣かさねても又たちかへる夕の袖やぬらさん

文永十三年内裏七夕七首歌中に七夕後朝を

遍照光院入道前太政大臣

あまの河なきさによするすゑのこの年ことにくるをやまつらん

題しらす

奉子内親王

立かへりかくる袖も涙にたなはたつめのあまの河浪

萩を讀侍りける　前内大臣隆

秋風はまたこすゑにて萩のえたしけくつゆる庭の夕露

寄秋風といふ事を　後光明照院

何人もうき宿からのさひしさを秋そとつくる荻の上風

題しらす　冷泉入道前太政大臣

ちるつゆを人にまちて萩の露にさそふうつろ色風をのみ
よそにのみ色付庭萩とはまさるを

権中納言経継

うき秋のよせの宿りとなるひに植てやしさき庭の萩原

秋の歌の中に　中務卿宗尊親王

さをしかの庭の萩原秋風にこぬ人松む宿のさひしさ

題しらす

夕暮はうつろひし里萩の葉にをやすくれ秋風の音のみ

秋夕の心を　掌侍頼子

あはれなるひかりそへてみえし秋の夕は袖にぞ露そはなさ

法のむしろすめるのみえとつきもうすき八秋の夕暮

入道前右大臣

ひとりすみし夜な袖も露そなく秋はいかなる月夕をみ尽

家をすてゝ人を厭ふとさらにそなき我は袖ひもさらに

もる中にあら露

源宰相春家卿

夜ふかくの露のをりよ吹よしふ清の荻ゆ気とおもひそ

摂政前関白内大臣

住吉社に百首歌合に詠み侍りける

よみ人しらず

桐の葉もやゝちり渡る洞庭のふくけしき秋の夕風

秋風もちる世に秋の風

後村上院御製

あまつ風桐の葉おちて雨も晴れしあとの秋の夕暮

題しらず

新待賢門院

ひかしに竹枝さやけくさ深くもおちし露の萩とよ花

菊花の所

萩の上に空にしら露わけ白妙にしらみつゝ葉のあきの夕

後村上院御製

染かとみるさまの露を秋萩の色にもとむる露の白露

萩の上に風も色そふ白露よそのまつみる月の庭

前大納言定房

家萩を侍りける時　中納言為忠

むらさきの花ハ一もとにて秋をしる色もこそみれゆかりの宗

関白家三百番歌合に萩露といふ事を

前中納言定宗

さく露もうつろふにしらんや秋萩の下葉をかけて色ふかき物

萩歌よろしといふ心を読侍ける

後村上院御製

萩かむらうつろふ色に高砂の尾上の色ハ袖のさすまも行かな

建武二年内裏千首の中に萩を

中務卿宗良親王

萩原やちるさかりとハ夕されハそのたもとにも花そしみぬる

千首歌の御歌よみ侍し中に落萩を

御製

風ふかハしくれてこそのちる萩入日をまちて袖かへす見ん

秋歌の中に

右近大将長親母

秋風の吹なにてらし露のおもけなるきにや萩を落かな

五百番哥合に　入道前関白太政大臣

あき山の松吹風にたくひきて鳴渡るなりさをしかの峯

ぬ鹿と　御製

小倉山ふもとの鹿の声あかしなりけりいつきも寝さめのみ峯

秋哥の中に　文[illegible]

哀人も袖そぬれまさる浅茅の野は露分てまくさかりのみ草

奥の渡りの間程まてくくさきとくるまてこそ涙

待りを浅時鹿と　民部卿親忠

夜もすからなかの洞によりあかしもあかしてや鹿の月に鳴らん

[illegible]

菅原為基

おもはくの草むらや宿のまくらに月に鳴らん　右大臣

さを鹿の声そきこゆる湊まて雲ゐも月も秋のさかりの

よみ人しらす

秋山の木の葉時雨にしくるゝ鹿のなくねも谷もみなもるる

従三位行能

山里の色の雲に風ふきて雨の田面に秋風そ吹

中院入道一品

誰なれと思ふ秋ひとりきく鹿の声は

五百番哥合に　　御製

風そよく志らへも高く聞ゆなり尾上の松の声しらへ

右大弁時長

松の風きくとしはなくてたかさこの尾上にかよふ秋の夕暮

西園寺前内大臣七百首哥の中に松風

妙光寺入道内大臣

秋風は夜さむの関の月そ吹なれしうらにそなく秋の夕暮

かよふ夜半の月のさやけき人々に音にきこゆる浦の冬

冷泉入道前右大臣

まゆのこしかくなきみか宿なれなかうきてのこる秋

秋哥の中に　　紀種文

難波かた入江もとほく吹そめて雲よりおつる秋の夕風

従三位國量

住吉の松の梢にほのめきて空ゆく雲のみなとのあはち島山

五百番哥合に　　前大納言忠良

もしほ焼煙の末も見えぬまて空にきえゆく浦の秋霧

題しらす　　後村上院御製

一本まつ嵐にたてる浦風に風よ散そふ灘の松原

千とせまて後の世語るはるの夕月

御製

夕かせの雲吹はらひて夜半の空にいてゝあとなき月の影かな

月五首の中に　入道前右大臣

むらくもは晴る夕の影にあらはれてさやかになりゆく秋の夜の月

従家入道右衛門督

たちまよふ雲もかゝらて夕月夜かつ見えそむる山の端の松風

中院入道一品

待もせし山のはいつる里人も見えて月はみる人そなき

二品法親王仁誉

山の端の松はしくれて浦波ははれてやまとよりいつる月の影かな

前関白家三百首歌の中に月御歌とて

権中納言公宗母

月はや山のはちかくなりあけて松のあらしに影そやとれる

題しらす　新待賢門院

出ぬまより光はそらにさえそへて夜のふけゆくまつの嵐に月

貞子内親王

雲かゝるとほき山松の木の間よりほのかにさえて出る月影

五百番歌合に　前大納言忠良

秋の夜は雲もなくてそ山の端の梢をはなれ出る月かけ

月歌の中に　祥子内親王

遠き峰松をこめてたつ霧もはれゆく山の端の月

中務卿宗良親王

松風は雲ゐのよそにつたへても猶わすられぬ秋の夜の月

建武二年人々に題をたまはりてよませられける時

まつるよの秋の月とみるをもわか世経らむ

後醍醐天皇御製

みる人の心もすみてよにこそはしるらん秋の夜の月

正平六年内裏三百六十首歌の中に葉中月と

妙光寺内大臣

見る人のよそのなれもまたてらしてもそれとしりぬる秋の月

中務卿宗良親王あまの川にて給ひし歌よみ侍し

のりのちかひを思ひ給ひし

後村上院御製

年をへてひとりの秋の秋にはわれ月は影をそへむかし

わすれぬなし

中務卿宗良親王

住のえそ雲のはれ月をそやこはひとりしらなむ

かきりみれにて

秋の様しき

新拾遺和歌集巻第五

秋歌下

五百番歌合に　関白左大臣

もろこしのかゝる雲井も此月にいかにみるらむ千里の外の雲

延元三年九月十三夜うへのをのこども題をさ

ぐりて月三十首歌つかうまつりける次に

前栽といふ事をよませ給ける

後醍醐天皇御製

まさこそ秋のよのひとつきまての雲月にいはゞかへる

月前露　吉田前内大臣

月影や山のはちかく成ぬらん難波の方はくもりもやせぬ

遠後月といふ事を読侍りける

右花左大臣

心あるこのとはいはしあきなく月にかゝるね難波の浦の

名所月といふ事をよみ侍る

前中納言定家

秋風やはらふ雲さへなかりけん河の名によするなる後の秋

住吉社三百六十首歌合に

前左近中将為実

葛城や高まの山の月影に雲そよくる山路の秋

民部卿為実

名もたかき秋の山風嵐に雲はれて月さへ高くさえしかは見えて月さへ

まだ惜む山ちかく見え侍りし法夜半のつきまて月をまん

て思ひつけ侍りし　中務卿宗良親王

これやこの秋のつとはあはれなりいさしらす姑射山の月

中務卿宗良親王信濃国伊那の河の辺りにて河

同山田といふ所にて侍りし法九月十三夜月に

わかれしもゆくなり侍りし

関白左大臣

月影もみるにいかなるかたみそとてすゑぬ山のはの月

同

中務卿宗良親王

あはれいつなくさめかねし心にはそれとも月もうらみき

野月を　よみ侍りし

秋萩をわけて枝なからやとしておれる袖の月影

月前中に　妙光寺内大臣

志賀の浦の浦の舟もこゆる波のみ月に浦をさそひ

海月といふ事を

後村上院御製

明石かたところ月の影すむものこゝのの秋の浦風

浦月を　従三位行家

明石潟月にさそはれて浦つたひ秋の夜

津守国久

志賀の浦の塩風もやしほの夜半の月影の袖や

新宰相の流

雅後江や若紫の浦風の夜に月の波舟をさそふ

正平十六年九月十三夜内裏にて人々

とゝめて行てよく月と

冷泉入道前右大臣

又やこん枕の風をとめむの江や名もなき月の秋

月輪の秋と云事

三条の卿懐紀

吉野川岩こえ浪によりてみれハ月もくたくる秋の川風

あかて月とみる事を

権大納言公実

わすれえぬ志賀の都は秋風にむかしや月の宿りなりけむ

千首歌よませ侍りし秋歌を

関白左大臣

月さへも秋の思ひをとりそへてまつ宵ありける秋の夜かな

題しらす

前中納言為家

露はらふ袖とや我の露ふかし月の影にも秋そしらるる

式子内親王

秋の夜の明なんとする浅茅生の露にやとれる月影

仙洞にて千五百番歌合に

よみ人しらす

山ふかみ月もやとりをかるもかく秋の庭の露の下草

題しらす

新宣陽門院

志らさりし袖の露もうちそへて月はかりこそ秋の心を

中院入道一品

かくそとはまさりぬる袖と山さとの月みる秋の心なりけり

権中納言経高母

白露のおくての山田かりそめん稲葉にやとる月やとるらん

前大納言光任

月やかハる身ハしらぬいかにこの秋そもかハらぬ影なるらん

正三位国夏

いさやそのかたぬ昔ハしらす我ともこれて萬代秋の夜の月

末かみるまて月を見んとそ祈りきつる

光明峯寺入道前関白左大臣

わか袖にやとりなれたる月とよもかさなり月のいくめくりハわすられぬ間に

千とせまつなにまもらし時雨月を

左京大夫師兼

世をはなれきくに秋の月とそて涙くもりぬ世をすてさくまき

題しらす

前太政大臣

さのミやハまたみるくハ寝覚をさそてふ月ハ涙のみつゝおもひける

文貞公女

心にはありとハ人にしられむも宮のうちよりはいそく秋の夜の月

文貞公

うき雲のかゝらぬ空にすむ月ハいつも見えてそ夜ふけにける

後醍醐天皇御製

幾秋を送りむかへて徒に老となるまて月をとそみん

前内大臣

捨てもなほ世をはなれぬと思ひける空にかゝるこの秋の月

二品法親王仁誉

山深くさらに思ひもすみぬへしをかくあらは月に入なり

延元二年九月十三夜人々のもとに題をさくりて
月三十首の哥つかうまつりける次に月前虫と
いふことをよませ給ひける

後醍醐天皇御製

蓬生にこそ虫も鳴也身ひとつの秋を月にかこつと思へは
悲しかりけれ

四条前左大臣

秋されはいつとても袖や露けきと虫のなくらん夕暮の空

二品法親王尊澄

なく虫の声をもわけて分入て草むらことに露やみたるらむ
千くさの花にまよひくる紀関雲

中務卿宗良親王

庭は西にまたをく秋の夜な/\虫の音よはる花枕の下ぞわりなき
松虫の声に秋をやしりてよませ給ひける

嘉喜門院

とはれはたのまれはたゝ松虫の声にちかくなる夕暮の空
秋の声ならし

従三位頼隆

虫の音もよわりはてぬる霜夜のこゝろにて光の影ぞかなしき

延元二年九月十三夜内裏月三十首哥中に月

前擣衣

前大僧正信聡

秋風も夜さむになれは月影のやとるあさちにうつ衣

延文二百首奉りけるに秋哥

読人しらす

わかしねのさはのむしろのうへて衣うつなりとなと渡やらん
ゆふしらん

幸子内親王

せ海の浦まの袖の秋風よのよはのましはら衣打なりたゆまさる

大宰帥泰成親王

とまりく夜寒に秋やなれぬらん里わかぬころもうつ衣

前摂政左大臣

擣衣しらて夜寒をとをつからいとゝやなほ衣うつなれ
とはきえ里に待りける法閨擣衣をひとりあかす
よそにきくらめ

中務卿宗良親王

ちきりしくすまひもつらし衣うつ月の砧やよそにもくさるくゝ

羈中百首哥の中に侍し中に

中務卿宗良親王

秋されは風のつらくもふけ行砧の音をきゝそてきく

秋の哥の中に

前内大臣 隆

里人の袖よかさねてやよくらのさむさよつけてうつ衣

日吉の社によみ奉りける五十首哥の中に

冷泉入道前太政大臣

山さとは夜寒くさねてしらくものかゝるの代衣うつらん

関白家三百番哥合に待人擣衣といふ事をよ

みてたてまつりし哥

右近大将長親

待出る月ハ夜さむのおりはへていとゝうつ衣かな

正平廿年内裏三百六十首哥の中に擣

衣

僧正慈静

みし秋の月にとはゝや古の人ハいかにてころもうつやと

元弘三年九月十三夜三首哥講せられし時

月前擣衣といふ事を

後醍醐天皇御製

きゝわひぬ八月九月なかき夜の月の夜さむに衣うつ聲

延元二年九月十三夜内裏三首哥の中に

九月十三夜

右大納言光任

長月の月も夜さむになるまゝによそにも里の衣うつなり

おなし心を

前内大臣

まつよはのおもひそへてや擣衣うつも更て月の夜さむにきく聲

題しらす

権大納言公夏

秋の夜のふけゆく空のよなかにしてなかくも出る月かけ

又百番哥合に　式部卿惟明親王

夜もすゝし峯吹風やはらふらむしら雲かゝる峯の月

月の哥の中に　前大納言實人

淺茅生やかれ行野への袖の上にやとれる秋の月

思ひ行心は秋そかなしめる

中務卿尊良親王

うきことも身をしら露やむすふらん秋に秋そふ秋のたもと

秋風のあはれを誰にかたりける

太宰大弐親母

かゝる露の影の猶やそふらん袖の秋の枕

君か代の月宮におほしくそめる殿裁菊といふ事を

よみ侍りける　後村上院御製

うつしうへし山路の菊のことしよりや九重にさく色そまされん

年中行事の百首の中に神祇の事を

權中納言長親

百敷や秋をつかさとる人のためにも菊の上の露やさか月

元弘三年九月十三夜三首の歌講せられし時

月前菊といふ事をよませ給ひける

後醍醐天皇御製

うつろはぬ色こそみゆれ白菊の花もひとつの月と光のさそ

岸ちかきの音もしつまりて

寂恵法師

ねさめしてたれかきくらんひまやまうらん浪のよるの岩ねの月の影のみ

嘉元の内大臣家百首に

権中納言経之卿

雁なきてさむきあらしの山陰に木の葉ちりかふ秋風ぞ吹

秋の夜中に

文貞公

風さむみ秋くるまゝに露深き家のやとりの山へなるまさ

度會通俊

さ川嶋のいなりよるしもとしらするはの木の葉ちりくるかなり

妙光寺内大臣

たつた山あらしの風のもみちはゝ秋ハにしきのあとたえぬらん

延元二年九月十三夜内裏千首哥中に

夜紅葉

右大弁清忠

照月さゆる夜のくまなき夜ハしらぬさゆる秋のもみちはく

さむしゝらん

おなし心を

そめかけし梢のうつる秋の色のくれはてゝも猶もみちなる

嵐ふく紅葉をさそふ世の中の

中宮

よものまの月のかけより紅葉ちる秋のもみちの

ちるらんとならし時雨の紅葉

右近大将長親

萩の葉は猶もつらき嵐かな折る梢の木末も色こそ色は

百首歌の中に松間紅葉を

後村上院御製

なかなかに松は流れなすさまの百くり紅葉や枕の色と結ぶ

建武二年人々に結題さくりて千首ありしなかに

つりを院に松楓といふ事を尽せ給ひし

後醍醐天皇御製

立田山嵐の稍も中中にまつに音してそむる紅葉は

飽しらひ

冷泉入道前右大臣

おきれくし時雨ぬるくも嵐山影をもそむる紅葉は

又百首歌の中に

源親氏朝臣

時雨行嵐山陰の下紅葉いつくもまてとさしてそめ

中宮女院すて絶ましく比の紅葉の枝をさ

ら御題にかうりたれは

新待賢門院

ちるや枕の紅葉よりは流れくるにや紅葉ちは色こそはあれ

流れし中宮まうりなりてう爾世給のきる

御製

ちりて後よせの枕も色うつるこや山風の紅葉

紅葉をよめる　右近大将長[illegible]母

深くなる秋の紅葉ハ錦とてうへの色そ錦なりけり

正平年中内裏にて三首中に山紅葉を

前中納言為忠

さくら山紅葉の錦たちそへん千世のめくみはいとくあらはる

権中納言経高母

題しらす

あきちかき里の嵐の風に乱れけり秋のもみちのちらぬ哉

従三位行子

紅葉のいろ移るまて秋やとりぬる三輪の山本

正平廿七年内裏百首の中に

権大納言公夏

紅葉ちる山のふもとの野のひと葉おちくれは竹井くる浪をたそける

暮秋紅葉といふ事をよませ給ける

前大史師兼

もみちや来むの霧の錦かゝ今は秋の面影ハなし

題しらす

前内大臣

あくるひの社の洞よくれなゐの秋ハと後てのこる白露

建武二年内裏にて三首の中に九月尽を

中務卿宗良親王

さりともと惜む夜をうらみつゝ今日の秋のゆくへの[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan